

都教委の挑戦

第1回

# 英語教育改革

社会の激しい変化を受け、学校教育の一層の充実が求められる中、教育委員会の後押しがますます重要となっている。そこで、本コーナーでは、多様な学校を有する東京都の取り組みを紹介していく。第1回のテーマは、英語教育改革だ。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを好機の一つとして展開する「使える英語力」の育成に向けた施策とは？

教育委員会の施策

生徒が英語4技能を使う環境を、学校内外で様々な整備し、「使える英語力」を育む

人材配置、教材提供、研修を柱に授業改善を支援

東京都教育委員会では、2013年度「東京都教育ビジョン（第3次）」の中で「国際社会で活躍できる人材の育成」を掲げ、「『使える英語力』の育成」「豊かな国際感覚の醸成」「日本人としての自覚と誇りの涵養」の実現に向け、様々な施策を展開している。指導部国際教育推進担当の瀧沢

佳宏課長はその目的をこう説明する。

「東京都は、海外からの来訪者とともに、定住する外国人も多く、2年後の東京オリンピック・パラリンピックを機に、その状況は加速するでしょう。そうしたグローバル社会の中で生きていく子どもたちに、自己実現する力を育みたいと考えています」

18年2月には、「東京グローバル人材育成計画'20」を策定。そこでは、東京の未来と、そこで活躍する人材

に必要な資質・能力を描いた上で、生徒・教師の英語力、国際交流に関する目標を設定し、①授業の質を高める、②学ぶ時間・機会を増やす、③学ぶ意欲を高め、学び続けるという3つ

を取り組みの方向性に掲げ、20の施策を示した。それらを具体化する事業として、人材配置、教材の開発・提供、研修の実施を充実させている（図1）。

「英語教育改革では『話す』力の育成に注目が集まりやすいですが、東京都が育成を目指すのは社会で『使える英語力』です。新学習指導要領でも目的や場面などに応じた言語活動が求められているように、自ら課題を設定し、方策を話し合うタスクベースの授業がさらに実践されるこ



東京都教育庁指導部国際教育推進担当課長 瀧沢佳宏 たきざわ よしひろ  
東京都立両国高校副校長、東京都教育庁指導部、人事部、都立学校教育部等を経て、現職。

とを目指しています」（瀧沢課長）

生徒が授業で4技能をふんだんに使えるように

高校教育にかかわる主要事業の一つが、「東京グローバル10」と「英語教育推進校」だ。「東京グローバル10」は、次代を担うグローバルリーダーの育成の取り組みを支援する事業で、10校の都立高校・中等教育学校を指定。一方、「英語教育推進校」

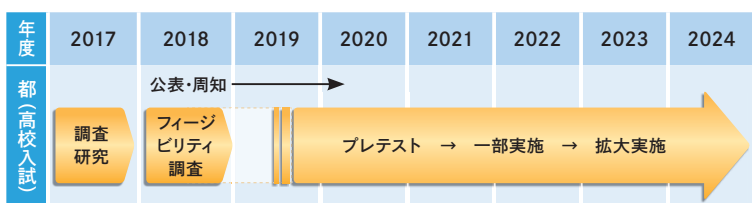
\*1 JET-ALTは、語学指導等を行う外国青年招致事業（JETプログラム）で雇用したALTのこと。Non-JET ALTは、自治体などが独自に雇用したALTのこと。

図1 東京都の英語教育に関する主な事業 (抜粋)

| 事業名                             | 開始年度 | 概要   |
|---------------------------------|------|--|
| 次世代リーダー育成道場                     | 2012 | 高校生の海外留学を支援する制度。より実りのある留学となるよう、事前・事後研修も実施。年間200人を派遣。   |
| 教員の海外派遣研修                       | 2014 | 中学校・高校の英語科教員を英語圏の国に約3か月間派遣。ホームステイをしながら現地の大学に通い、英語を母国語としない人に対する英語教授法のTESOL(*3)を学ぶ。年間140人を派遣。2016年度からは小学校教員にも拡大。     |
| 授業改善に向けた4技能評価の導入                | 2016 | 「東京グローバル10」及び「英語教育推進校」に対して、英語の資格・検定試験を活用した生徒の4技能の英語力調査を実施。   |
| オンライン英会話学習                      | 2016 | タブレット端末を使ったオンライン英会話学習(ベネッセの「Online Speaking Training(*2)」)を、「東京グローバル10」の全校、「英語教育推進校」のうち12校に導入。1回30分間、月3回、主に2年次で実施。 |
| 東京都英語村(TOKYO GLOBAL GATEWAY)の整備 | 2018 | 小学生～高校生が利用できる体験型英語学習施設。日常生活を想定したやりとりを英語でするプログラムや、英語で様々な分野を学ぶプログラムがある。  |

\*東京都教育庁提供資料を基に編集部で作成。

図2 東京都立高校入試英語検査改善の想定スケジュール



\*「東京都立高等学校入学者選抜英語検査改善検討委員会報告書」(2017年12月)を基に編集部で作成。

は、都立高校の英語教育を先導することを目的として、40校の都立高校・中等教育学校を指定した。指定校には、JET-ALT(\*1)の2人配置、英語の資格・検定試験を活用した英語4技能調査、ベネッセの「Online Speaking Training」(以下、OST)。

は、事業を各校の教育課程に応じたものにする事だ。「学校のニーズも踏まえて事業を計画しますが、実施が決定するのは年度末になるため、年度途中での導入となります。各校を訪れて事業内容を説明し、既に実施されている教育課程に事業をどう組み込むのかを一緒に考えるなど、丁寧な対応を心がけています」(瀧沢課長)

事業がさらに効果を発揮するよう、教員研修にも力を入れる。教員の海外派遣研修では、TESOL(\*3)を学ぶ場とし、受講者には、自身が学んだ指導法を帰国後に校内や地区に広める役割を担わせるようにした。「小学校の英語教科化によって、小・中・高での一貫した英語教育が一層重要になります。研修では、校種を超えた教師の交流の場も設け、互いの指導を知り、12年間の連続性を意識できるようにもしています」(瀧沢課長)

また、中学・高校の英語教育のさらなる充実に向け、高校入試における英語4技能評価について、有識者や校長らによる委員会を立ち上げて検討を始めた(図2)。現段階では、「話すこと」の検査の実施について、英語の資格・検定試験の活用を前提とし、学習指導要領に準拠した内容の担保、活用する試験の一本化、受験回数は各受験者1回といった方向性だ。

### 高校入試での英語4技能評価の検討に着手

今後力を入れる施策として挙げられるのは、国内での国際交流だ。高校生の海外留学を支援するとともに、日本にいながら海外留学に近い経験ができるよう、外国人留学生を積極的に受け入れている。さらに、18年度、国際交流に関する情報を一元化し、学校からの相談に応じる「国際交流コンシェルジュ」を新設。同9月に

「中学校までに身につけた英語力を、各高校の特色ある教育により、自校が目標とするレベルにまで高めて卒業させる役割を果たす上で、高校の英語入試はどうあるべきか。入学—教育課程—卒業という一貫したポリシーの下、英語教育の充実という視点で、検討を進めていきます」(瀧沢課長)

は、ネイティブスピーカーが常駐する体験型英語学習施設「TOKYO GLOBAL GATEWAY」を開設した。「多様な人々と対話し、新たな価値を創造する力を身につけるためには、実際にその経験を積むことが重要であり、外国人と直接交流する意義が一層高まると捉えています。多様性を理解し、寛容性を高めて、他者と良好な関係を築く力を、子どもたちに育みたいと考えています」(瀧沢課長)

\*2 ベネッセが提供するサービスの1つで、インターネットのテレビ電話を使って、ネイティブスピーカーと1対1での英会話練習ができるサービス。 \*3 Teaching English to Speakers of Other Languagesの略。英語を母国語としない人を指導するための教授法。第二言語習得理論、語彙・文法・発音などの教授法、カリキュラム、指導案、評価法などを学ぶ。

東京都立小石川中等教育学校

6年間の系統的な指導と、生徒が  
4技能をバランスよく使う授業を  
通じて、「使える英語力」を育成

「東京グローバル10」指定を  
機に、英語教育が一層充実

東京都立小石川中等教育学校は、教育理念に「立志・開拓・創作」を掲げ、「国際社会に生きる日本人として、幅広い教養と豊かな感性及び高い語学力を身につけた生徒」を、育てたい生徒像の1つに掲げている。その実現に向け、英語教育では6年間の系統的な指導を展開し、英語をツールとして活用する力を育てている。土方賢作副校長は、同校の英語教育の方針を次のように語る。

「授業は、生徒が4技能をバランスよく使えるような展開とし、自分の意見を言う場面を随所に取り入れています。教師は基本的に英語で授業を進めますが、低学年ほどその点を意識して授業を行っています」

指導の軸となるのは、1人1家庭に2週間ホームステイをする中学3年次の海外語学研修と、連携校におい

て英語で課題研究の発表などを行う高校2年次の海外修学旅行だ(図3)。

「現地の人と対話できるようにすることが、生徒にとって英語学習の強い動機づけになり、教師にとっては発信型の授業をする必要性への共通理解に結びついています」(土方副校長)

そうした国際理解教育が評価され、同校は東京都「東京グローバル10」に15年度から2期連続で指定された。都教委の支援を受け、ALT4人体制(\*1)とし、16年度からはOST(\*2)を実施するなど、4技能を育成するための環境がより充実している、久保静生副校長は語る。

「指定を受けたことで、他校の視察の機会が増え、それらも動機づけとなって、教師の指導力向上がさらに図られています。生徒も、授業で英語を使う環境がより充実したこと、学内外で英語を使うことに積極的になっていると感じています」

図3 英語教育の主要な活動

|     |                     |   |
|-----|---------------------|---|
| 1年次 | レシテーションコンテスト        | “The Three Little Pigs”(三匹の子豚)の絵本を、ジェスチャーや擬音、歌を織り交ぜながら暗唱する。   |
| 2年次 | 国内語学研修              | 都内の宿泊施設で2泊3日、生徒8人にネイティブスピーカー1人がつき、英語漬けの3日間を送る。ホームステイで行われる日常会話に加え、数学や理科、体育などの授業を英語で受ける。  |
|     | スキットコンテスト           | 各クラス2班が代表となり、テーマに沿ったスキットを、身振り手振りを交えて発表。   |
| 3年次 | オーストラリア海外語学研修       | 夏季休業中に2週間、1人1家庭にホームステイをしながら、現地校に通い、英語を学ぶ。   |
|     | リサーチ&プレゼンテーションコンテスト | 海外語学研修中に疑問を持って調べたことを、帰国後、各自の仮説・検証・結論を英文でまとめ、プレゼンテーションソフトで発表する。  |
| 4年次 | スピーチコンテスト           | 冬季休業中の宿題として書いた400wordsの原稿をスピーチする。   |
|     | 英語による論文作成           | 「小石川フィロソフィー」(*3)で取り組む課題研究について、希望者は英語で論文を執筆。   |
| 5年次 | シンガポール・マレーシア海外修学旅行  | 2月に4泊5日を実施。シンガポールでは連携校4校に40人ずつ分かれて訪問。「小石川フィロソフィー」の研究内容をポスターにして英語で発表したり、現地の高校生とディスカッションを行ったりして交流する。マレーシアでは、農村を訪れ、現地の家庭と交流する。また、事前学習として、留学生を招いたディスカッションの研修や、マレーシア人を招いた学習会も実施。 |

\*学校資料及び取材を基に編集部で作成。



東京都立小石川中等教育学校  
石澤昌大 いしざわまさひろ  
教職歴8年。同校に赴任して5年目。英語科。



東京都立小石川中等教育学校  
久保静生 くぼしずお  
教職歴22年。同校に赴任して2年目。



東京都立小石川中等教育学校  
副校長  
土方賢作 ひしかたけんざく  
教職歴29年。同校に赴任して4年目。

東京都立小石川中等教育学校

◎東京府立第五中学校として創立。2006年、中等教育学校として開校し、中高一貫校化。「小石川教養主義」「理数教育」「国際理解教育」を柱とし、教育活動を展開。2006年から3期連続で、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」に指定。15年度から2期連続で、東京都「東京グローバル10」に指定されている。

◎設立 1918(大正7)年  
◎形態 全日制/普通科/共学  
◎生徒数 1学年約160人  
◎2018年度入試合格実績(現浪計)  
国公立大は、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、京大などに80人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ408人が合格。  
◎URL <http://www.koishikawachuto-e.metro.tokyo.jp/site/zen/>

\*1 JET-ALT 2人、Non-JET ALT 2人。 \*2 ベネッセが提供するサービスの1つで、インターネットのテレビ電話を使って、ネイティブスピーカーと1対1での英会話練習ができるサービス。 \*3 全校生徒が6年間を通して取り組む課題研究のこと。



## 4技能を複合的に使い、 自分の意見を表現する

授業の様子を見ていく。英語科の石澤昌大先生は、14年度、都教委の海外派遣研修を受けて、指導の幅が大きく広がったと言う。

「私自身、学生時代にコミュニケーションがあまりなく、指導の引き出しが少ないのが悩みでした。そうした時に、海外派遣研修でTESOL（\*4）の多彩なメソッドを学び、一緒に研修に参加した同僚とモデル授業をしたことは、大変勉強になりました」

石澤先生の授業は、4技能を複合的に使う活動が中心だ。4技能育成



写真1 問題演習が中心となる高校3年次の授業でも、ほぼ英語で授業が進められた。最後に、問題内容に関連して、「社会保障の条件が違う2つの国を比べて、どちらに住みたいか」と先生が問いを出し、生徒は1分間考えた後、隣同士で1分30秒ずつ英語で自分の意見を伝え合った。



写真2 高校2年次で行われたOSTの様子。生徒たちは楽しそうに講師と話していた。「学習した文法を使って、言いたいことを伝えられた時は、英語が自分のものになったと実感できてうれしい」と感想を聞かせてくれた。

に効果的な指導法の1つはディベートだと、石澤先生は指摘する。テーマについて調べ、原稿を書き、相手の発言をよく聞いてスピーチをする。その一連の流れの中で4技能を複合的に使うことが、結果的に4技能のバランスのよい育成につながると言う。

また、オープンエンドの問いを投げかけ、自分の意見を書いたり発表したりする場も設ける（写真1）。答えが1つではない問いを考え、他者の意見を聞くことで、思考力と広い視野を育むこともねらいの1つとしている。

生徒との対話では、生徒の発言を否定しないよう心がけていると言う。

「今後、生徒は多様な価値観を持つ人々と協働して社会を築いていくこ

とになるでしょう。そうした時に大切なのは、自分が理解できないことでも、まずはしっかり聞いて、受け入れることです。他の生徒が否定的な態度を取っても、私が認めることで、他者の価値観や考え方を受け入れる姿勢の大切さを伝えたいと思っています」（石澤先生）

## 1対1の対話だからこそ 自分だけの学びがある

同校は、OSTの活用も積極的に進めている（写真2）。生徒の様子を見ると、英語が苦手な生徒ほどうまく活用している、石澤先生は指摘する。

「生徒個々がタブレット端末を持ち、ヘッドセットをつけるので、周りに自分の会話は聞かれません。講師は発音などを間違えても嫌な顔はしませんし、言葉に詰まった時にはアドバイスをくれます。思い切り英語を話す練習を積み、次第に授業でも英語で発言できるようになっていきます」

講師とのリアルタイムの対話が楽しいと、OSTを受講した生徒は話す。「講師とは趣味などの話もします。自分が話したいことを言え、それについてほかのよい表現も教えてくれ

るので、自分だけの勉強になります」

様々な国際理解教育を受けてきた生徒は、海外留学への意欲も高い。

「次世代リーダー育成道場」の応募者は年々増えています。また、今年度の高校3年生には、海外大学への進学希望者が数人います。都教委の協力も得ながら、希望進路の実現を支援していきます」（久保副校長）

海外留学者が帰国後、校内に及ぼす影響も大きい。17年度「全国高校生英語ディベート大会」で5位に入賞した現高校3年生の4人のうち3人は、「次世代リーダー育成道場」での留学経験者だ。SNSでディベートの練習相手を探し、インターネットのテレビ電話で練習試合を行うなど、自ら行動して腕を磨いてきた。そうした先輩の姿に刺激され、下級生にも参加希望者が現れ、活動を継続している。

今後の課題は、生徒中心の授業をさらに進化させることだと語る。

「教師はどうしても、習得してほしい知識・技能から授業を展開しがちです。その発想を転換させ、『環境改善案を作成しよう』といった、『何ができるようにするか』を軸とした授業を目指して、指導力をさらに高めていきたいと思えます」（石澤先生）

\*4 Teaching English to Speakers of Other Languages の略。英語を母国語としない人を指導するための教授法。第二言語習得理論、語彙・文法・発音などの教授法、カリキュラム、指導案、評価法などを学ぶ。